

# 巻 頭 言

村 上 和 夫

立教大学 観光学部 学部長

本号は、小沢健市先生ならびに松本和幸先生のご退職記念号です。

両先生ともにご専門は経済学です。小沢先生は観光経済学を軸に講義をされ、松本先生は産業分析を通じて観光産業の役割を論じられました。近代における観光事業は、とくに外貨獲得のための経済政策のひとつとみられる傾向があり、国内の地域開発においては地域活性化のために経済効果を生む重要な手段として位置づけられてきました。そのために、経済学は高等教育における観光教育の核となって参りました。

小沢先生は大学院観光学研究科の中心として、外国人学生も含め多くの学生を指導され、観光経済学の先端を拓く修了者を数多く輩出されました。彼らは、日本の大学ばかりでなく世界で活躍しています。松本先生は、大学院ビジネスデザイン研究科の中心教員として多くの社会人学生に統計学などの研究を指導され、革新を担う産業界の多くのリーダーを輩出されました。まさにお二人は、日本の観光研究と教育の中心である立教大学の中核を担われました。奇しくも、お二人の先生が同時にご退職になられることとなります。

お二人の先生のご退職を期に観光学部は暫く教員の退職が続きます。これと併せて、2016年には立教大学では学士課程の統合カリキュラムが実行へと移される予定です。2013年は、久しぶりの好景気と2020年のオリンピックとパラリンピックの東京開催が決定しました。まさに、観光学部は、世代交替と同時に観光を理解するパラダイムの転換と新しいステージへの飛躍が強く求められることとなります。

観光は地球規模の人の移動、すなわち旅行を伴う社会現象であり「楽しみのための旅行」と定義されます。近代からの研究や教育をみると、交通機関の発達やビジネスの革新、観光の経済効果への期待から、この定義の後半である旅行に関心が集中してきました。観光産業の経営や観光旅行が与える経済・社会・文化の変容などがそれです。しかし、社会のソーシャル化が進む中で、徐々に関心は旅行から生まれる楽しみへと移行し始めています。さらに、UNWTOは、観光が今後の世界の旅行需要の急成長を促すとしていますが、旅行費用の将来的な上昇やインターネットなどを通じて世界各地がシームレスに結ばれるようになると、近代的な意味の移動が継続することへの疑問も想定しなければなりません。観光の将来的な可能性は、もはや過去を延長して議論するだけでは得られないのです。

世界には、未だに地域紛争が残っていますが、紛争が終了した地域では人々の市民意識の向上とグローバル化への取り組みが盛んになってきました。ところが、グローバル化は進んでも、それを調整するグローバリズムにはまだ検討の余地が残されています。観光学部が新しいステージを迎える為に、グローバリズムに関する議論は避けて通れない新しい課題です。さらに、多くの産業は観光の分野が培って来た経営の技術や文化交流の方法、さらには審美観や倫理観などに関心を寄せています。そのような観光に関する知識や技能が他の産業を革新する鍵となる為の研究や人材育成をはかる必要もあります。

まだまだお元気な小沢先生ならびに松本先生が、この大切な時に学部を去られることは、とても残念なことです。我々はお二人の先生を通じて学ばせて頂いた教育ならびに研究への姿勢を継承し、今後の学部の発展に努力することを誓うものであります。小沢先生ならびに松本先生にはどうかご自愛いただき、ますます研究をお進め頂きますようお願いを申し上げます。